

漱石漢詩の一考察（四）

大地 武雄

明治の文豪夏目漱石には、晩年「明暗」執筆中に、七十五首の漢詩作がある。これらの漢詩については、数人の先行研究があるが、未だ解明しきれない問題が残っている。それらについて引き続き私見を述べる。

十三

十月二十一日の「無題」詩は、

吾 失 天 時 併 失 愚	吾 天 を 失 う 時 併 せ て 愚 を 失 う
吾 今 會 道 道 離 吾	吾 今 道 に 会 え ば 道 吾 を 離 る
人 間 忽 盡 聰 明 死	人 間 忽 ち 尽 き て 聰 明 死 し
魔 界 猶 存 正 義 臞	魔 界 猶 存 す 正 義 の 臞
擲 地 鏗 鏘 金 錯 劍	地 に 擲 っ て 鏗 鏘 金 錯 の 劍
碎 空 燦 爛 夜 光 珠	空 に 碎 け て 燦 爛 夜 光 の 珠

獨 吞 涕 淚 長 躊 躇 独り涕涙を吞んで 長く躊躇す

怙 恃 兩 亡 立 廣 衢 怙恃両つながら亡って 広衢に立つ

である。この詩は、これまでの研究者によって、次のように解釈されている。

佐古純一郎氏は、

私が「天」に則^{のっと}ることを忘れる時は、同時に「大愚」の理想を失う時でもある。私が「道」を会得したと思えば、今度は「道」の方が私から離れてしまう。俗世間にあつては、賢明であるがために、かえってそれが致命傷になることもある。また魔界にあつては、当然忘れ去られるであろう正義が、どうにか取り残されたりもする。

黄金の剣は、地に投げ捨てたとして美しい音色を響かせるであろうし、夜光の珠玉は、空中に砕け散っても光り輝くであろう。（しかし私は、いったいどのようなにして「道」を求めたらよいのであろうか。）今はただ一人で涙をこらえ、長い間ためらうばかりである。そんな私の様子は、両親を失って呆然と立ちつくす子供のようである。

中村宏氏は、

天との合一を失った時、「大愚」も失われる。道をとらえたと思えばまた道の方から離れて行く。絶対境に遊べば形相を超越するが、現実界にいる以上、やせても枯れても正義を守らねばならぬ。真理は鏗鏘と響き燦然と輝いているのに、私は独り涙をのんで、大道に立ちもとおっているのだ。

飯田利行氏は、

私は、かねてから天の道に則るべくつとめてきたが、今になりその求めんとする志向性を忘^{わす}失れてしまうことができた。

そしてわすれた途端^{とたん}に、あわせて、ずっと守りつづけてきた頑愚の美德をもわすれ去ることができた。だが、その私が、天の道の会得^{えとく}、つまり解脱^{げだつ}をすれば、天の道の方で私の方についてくることが分かった。

「兎角^{とかく} 住みにくい人の世」では、「才子 才に倒る」の諺を待つまでもなく、多知多解^{たかち}が禍^{わざわい}して、あつという間に人間失格となる。一方「人でなしの国」といわれている魔界では、「武士は食わねど高楊枝^{たかようじ}」然とし、身を細めても正義に殉ずる者が、今なおいるという。

黄金をちりばめた剣は、地上に投げすてられてもコウショウたるひびきを発し、また夜光の珠は、空中にむかつて砕いてもきらきらと光り輝くという。しかし、玉碎^{ぎんせき}といい、全瓦^{がぜん}というも、ともに執^とらわれから脱しきれない行動の展開である。とはいえ、思い返せば、私もそれらと似たり寄つたりの生きざまであった。

その越し方を追想すれば、ただ涙を吞んで呆然とし、ずっとためらうばかりである。だが、曾つて頼みとしていた〈天〉と〈愚〉とから解脱^{げだつ}して、今やさらりとした気分で、広い世間に向かって、誰れはばかることなしに出で立つことができるようになった。

以上三氏の解釈である。訓読については大きな差異はないが、解釈は分かれるところがある。

次に、これら各聯各句について私見を述べると、二句目の「道」について、九日前の十月十二日の「無題」詩に、「會天行道是吾禪」とよんでいるところから、この道は、「會天行道」であろう。「會天」を「行道」とする漱石からすれば、道が自分から離れて行けば、当然の帰結として、「天を失い」あわせて「愚を失う」ことになる。そうになると、魔界^{まがい}に少しばかりの正義は残つても、人間界には聡明なる者は尽きて、金錯の剣も、夜光の珠も消え失せてしまう。そして、子が頼みとする父母を失うように、漱石にとって頼みとする天と愚を失うことになり、四方に通ずる広衢で進むべき方向を見失って、長い間どうしてよいか立ちもとるばかりになる。

この日、愚を意識して次のような五言絶句三首をよんでいる。

元は一城主 焚城行廣衢 行行長物盡 何處捨吾愚

元是喪家狗 徘徊在草原 童兒誤打殺 何日入吾門

元是錦衣子 賣衣又賣珠 長身無怙客 赤裸裸中愚

いずれも愚を希求してやまない漱石の真摯な姿が詠じられている。漱石は、「愚」を求め愚を漢詩、俳句⁽²⁾、短歌、小説という己の文学活動の中に言及し、愚を求め続けた人であるし、現実にはそうないがゆえにかえって、そうありたいと願ったのである。それ故に、天も愚も失うことは、漱石生涯の希求のものを失うことでもある。

この詩の詩意は、各聯前後入れ替えてとらえることでより明確になる。

私が今道に会うと道が私から離れていくので、天を失う時あわせて愚も失う。魔界には正義が少しは残っているが、人間界には聡明なる者は尽きていない。夜光の珠が空に碎けて光り輝き、金錯の剣が地に投げ捨てられて失われていく。私は天と愚を失って四つ辻に立ち、独り涙をのんで長い間どうしていいかためらうばかりである。

十四

十一月十三日の「無題」詩は、

自笑 壺中大夢人 自ら笑う 壺中大夢の人と

雲 寰縹緲忽忘神 雲寰縹緲 忽ち神を忘る

三竿 旭日紅桃峽 三竿の旭日 紅桃の峽

一丈 珊瑚碧海春 一丈の珊瑚 碧海の春

鶴 上 晴 空 仙 翮 靜 鶴は晴空に上つて 仙翮靜かに

風 吹 靈 草 藥 根 新 風は靈草を吹いて 藥根新たなり

長 生 未 向 蓬 萊 去 長生未だ蓬萊に向つて去らず

不 老 只 當 養 一 眞 不老只だ當に一眞を養うべし

である。この詩は、これまでの研究者によつて、次のように解釈されている。

佐古純一郎氏は、

小さな壺の中のような狭い世界で、大きな夢をみて暮していたこれまでの私を笑わずにはいられない。改めて大空を見上げれば、縹緲として果てしない彼方に吸い込まれ、無心の恍惚境に遊ぶのである。聞くところによれば、蓬萊山には高く昇つた朝日に谷の紅桃が映え、大きな珊瑚が春の青い海に生えているという。

また、青空を鶴が靜かに羽を動かして昇り、春風に靈妙な藥草の根も新たに張っている。しかし、不老長生を求めて蓬萊山へ行く必要はない。それはただ本当に「一眞」つまり、「まことの眞実」を心の中に育てることによつて得られるのだから。

中村宏氏は、

私は壺中の天地に在つて夢の如き人生を送っている人間だ。はるかに雲浮ぶ天上を仰いで恍惚境こうこつに入る。朝日は桃咲く山かいを照らし、春の海にサンゴが輝いている。青空に靜かに舞うツル、奥山の靈草にそよふく風。不老長生を求めるには、何も蓬萊に行かなくとも、何よりも心の中に道の眞諦を養うことだ。

飯田利行氏は、

壺の中に入つて、人間誰れしもが抱く官能的な慾望をみたしてくれるような大きな夢を見た人を、あわれと思つていた私

であった。だが、考えてみると、その人にも似たような私の越しかたの生きざまだ。文芸界という小さな天地に踟躕して、あたふたしていた自分の姿をあざけり笑いたくなくなった次第である。壺の中から出て、大きな世界を仰げば、そこには、雲の去来する高いはるかなる世界がくりひろげられてあり、思わず我が身を忘れてうつとりするほどである。そのように感に入るほど、我が身の倭小さが、今さらながら、あわれに思えてならない。

伝え聞くところによれば、蓬莱の島には、高だかと昇る朝日に、山合いを彩る紅い桃花が匂い、丈余の珊瑚が、春の青海波に映え、鶴は青空に舞い上り、綺麗な羽ををじつと静止させ、風が不老不死の薬草になびくと、その草の根が、威勢よく伸びさかるといい、そこが、桃源郷だという。

秦の始皇帝は、不老長生の薬を求めて蓬莱の島に徐福を遣わしたが、私は、そのようなものを求めて蓬莱に行こうとは思わない。私にとつての不老長生とは、たゞ絶対の真実を長に養うべきことにかぎられる。かくして不断の春を、永遠の今として生きぬくことだけである。

以上三氏の解釈である。訓読については大きな差異はないが、解釈は分かれるところがある。

次に、これら各聯各句について私見を述べる。この詩の首聯は、漱石が壺の中という小さな世界にいて、大きな夢を抱いてきた自分を嘲笑し、空に漂う無心なる雲を見ているうちに神仙界を忘れるさまを詠じている。二句目の「神」は、キリスト教の神でもないし、日本固有の民族信仰発展の神道の神でもない「神仙界」をいう。

頷聯、頸聯はその神仙界の様子を詠じたものである。三竿は、竿を三本ほど繋いだ程の高さをいい、紅桃峽は、山合いに咲く桃花をいい、桃源境（桃源郷）をたとえていよう。一丈は十尺、三十メートル程の大きな珊瑚。碧海春は、春の大海原、神仙が住むという蓬莱山のあるところ。鶴は、千年の長寿を保ち、仙人が乗る仙鶴をいう。靈草は、不老不死の仙薬である。尾聯は、不老長生を求めて蓬莱山（神仙界）に行くことはやめて、老いることなくただ／＼真を養うことに努力精進すべ

きであるという。

十月六日の「無題」詩に、「非耶非佛又非儒」とあるが如く、キリスト教や仏教や儒教を否定し、神仙界も否定した漱石は、この三日後の十一月十六日の木曜会の席上、弟子達に、漱石独自の境地「則天去私」を披露するのである。

詩意は、壺の中という小さな世界で大きな夢を見ていた人（自分）を嘲笑する。あの空にゆったり漂う雲を見ていると忽ち神仙界を忘れてしまう。神仙界は、三竿程の高さに太陽が輝き、山あいには赤い桃花が咲いている。一丈程の珊瑚が春の大海原に群生している。鶴は晴れわたった空に静かに羽根を動かして上り、風は不老不死の葉草に吹きつけその根も新たにしている。が私は、不老長生の仙薬を求めるため蓬萊山に行くこともせず、ただひたすら真をわが身に養うだけである。

十五

十一月十九日の「無題」詩は、

大愚難到志難成

大愚到り難く 志成り難し

五十春秋瞬息程

五十の春秋 瞬息の程

觀道無言只入靜

道を観るに言無くして 只靜に入り

拈詩有句獨求清

詩を拈るに句有りて 独り清を求む

迢迢天外去雲影

迢迢たる天外 去雲の影

籟籟風中落葉聲

籟籟たる風中 落葉の聲

忽見閑窓虛白上

忽ち見る 閑窓虚白の上

東山月出半江明

東山月出でて 半江明らかなり

である。この詩は、これまでの研究者によつて、次のように解釈されている。

佐古純一郎氏は、

私の理想である「大愚」の境地に到達することは難しく、その志は成就できそうもない。思えば五十年の歳月は、あつという間に過ぎてしまった。真の道は言葉で表現できるものではなく、ただ静座して悟りを開こうとするばかりである。また漢詩を作るにも、ひたすら清澄の句を求めるだけである。

遙か彼方、空の果てに去り行く雲の姿を追ひ、吹き渡る風の中に落葉の音を耳にする。ふと閑かな窓辺のあたりが、ほのかに明るいのになががついた。東の山際から月が出て、川の半ばを照らしているのだ。

中村宏氏は、

大愚の境地には到達し難く、志も成就出来ぬままに、五十年の歳月が忽ち過ぎ去ってしまった。黙々と静坐して道を観ずる。わが詩の求めるところは、ただ清の一字である。天の果てに行雲の姿を追ひ、吹く風に落葉の声を聞く。ふと窓のあたりが薄明るいと思つたら、東山に月が出て川を照らしているのであった。

飯田利行氏は、

大愚の世界に到達することのむずかしさ、特にその事と志とを両全させることのむずかしさをしみじみとかみしめる。時すでに五十歳。だが想えば、あつという間の生涯であつた。

そして私は、五十になつて始めて道に志すことに氣のついた愚物。心を無心にして、道に三昧となれば、黙を貴しとなし、ただ寂靜の世界に入り、太古のような静けさと、過・現・未を超越した無限の時間に生きうることがわかつてきた。また無

心にして、詩を作れば、葛湯くすゆを練ねるときに要領よろしく、こちらから求めぬうちに先方から争あって、韻字平仄が用箋に踊り出てくるといった次第。ただし私の求める文字は、超然と出世間的に、利害損得の汗を流し去ったような心持ちになれる、さすがしさをたたえたものばかりである。

私は、世の中にすきな人がだんだんなくなり、その反対に天と地、草と木といった「黙」なるものが、美しく見えてきた。御覧なされ。はてしなく、はるか彼方の天の外に向って、ちぎれ雲が無心に流れているさまを。またさやさやと吹く風の中に、大地に落ちるかそけき木の葉の音をお聴きなさい。この落葉ひづきの声に、大愚良寛も滂沱ぼうたと涙を流したという。

突然、静かな部屋の窓に、月しろが映るのが見えたかと思ったら早くも東の山の端はから月が出て、白露が江の中ほどまで横たわったかと思われるほど銀波が美しく走った。まさにこれあるかな。大自然のささやきは、無心なるがゆえに、人の胸にせまる。

以上三氏の解釈である。訓読については大きな差異はないが、解釈は分かれるところがある。

次に、これら各聯各句について私見を述べると、首聯の「大愚」について、三日前の十一月十六日の木曜会の席で、漱石は「則天去私」について弟子達に明らかにしたところから、この大愚は少なくとも「則天去私」ではなく、それを越えた境地ととらえるべきであろう。

また、漱石の心魅かれる良寛は、大愚良寛であり、友人の米山保三郎は、大愚山人であるとしても、良寛や米山に到りたということでもあるまい。

領聯の「観道」の道は、十月十二日の「無題」詩に、「會天行道是吾禪」と詠ずるところの「道」であろう。それは「無言」の世界で、表現出来る言語のないことをいう。漱石が心魅かれる中国東晋の詩人陶淵明が「飲酒」其五で「採菊東籬下 悠然見南山 山氣日夕佳 飛鳥相與還 此中有眞意 欲辨已忘言」と詠ずるところの超言語の世界をいう。

また、この詩の四日前の十一月十五日に、富澤珪堂宛の手紙に、

変な事をいひますが、私は五十になつて始めて道に志す事に氣のついた愚物です。其道がいつ手に入るだろうと考へると、大變な距離があるやうにも思はれて吃驚してゐます。あなた方は私には能く解らない禪の専門家ですが、矢張り道の修業に於て骨を折つてゐるのだから、五十迄愚図／＼してゐた私より、どんなに幸福か知れません。

と述べているところの道であろう。

尾聯の「半江明」は、川の半分が東山に出た月の光に照らされて明るくなり、半分はまだ暗いことをいう。恐らくこの二句は、当時漱石の住居が川の近くでないところから实景でなく、虚構であろう。暗から明を得つつある漱石の心境を物語っているのではないだろうか。

詩意は、大愚をめざしたが大愚はとても到達し難く、到達したいという志も成就し難いまま、五十年の歲月は一瞬のうち過ぎ去ってしまった。大愚の道を觀るに表現する言葉もなく、ただ静寂境に入るばかり、私は今詩句を拈つて詩を作り、ただ清を求めるだけだ。遙か遠い天外には去り行く雲の姿があり、そよ吹く風には落ち葉の音がする。静かな窓に白い月明かりを見ていると、東の山の端に月が出て川の半分程が明るくなった。

十六

十一月二十日の「無題」詩は、

眞蹤寂 寞 杳 難 尋 眞蹤寂寞 杳として尋ね難く

欲 抱 虚 懷 步 古 今 虚懷を抱いて古今を歩まんと欲す

碧 水 碧 山 何 有 我 碧水碧山 何ぞ我有らんや

蓋 天 蓋 地 是 無 心 蓋 天 蓋 地 是 無 心

依 稀 暮 色 月 離 草 依 稀 茫 茫 暮 色 月 草 離 離

錯 落 秋 聲 風 在 林 錯 落 茫 茫 秋 聲 風 林 在 在

眼 耳 雙 忘 身 亦 失 眼 耳 茫 茫 而 忘 身 亦 失 失

空 中 獨 唱 白 雲 吟 空 中 獨 獨 唱 唱 白 雲 雲 吟

である。この詩は、これまでの研究者によつて、次のように解釈されている。

佐古純一郎氏は、

森羅万象の真実の相は、ひっそりとして静寂であり、まことに深遠で容易に知ることはできない。自分はなんとかして私心を去つて真理を得ようと東西古今の道を探ねて生きてきたことである。一体、この大自然にはちつぽけな「我」などないし、仰ぎみる天や俯してみる地は、ただ無心そのものである。

自分の人生の終りを象徴するかのように暮れようとする黄昏どき、無心の月が草原を照らし、吹きわたる秋風が林の中を通りぬけていく。この人生の最期に立つて、もはや自分は小さい私の欲望や感覚を越え、自らの存在すらも無にひとしいように感じるのだが、そのような心境で空を飛ぶ純白のあの雲のような自由さに想をよせて、自分の「白雲の吟」を唱うのである。

中村宏氏は、

本当の道はいわゆる没蹤跡^{もつしょうせき}で、そのあとを尋ね難い。何ものにも執われぬ心で古今を歩んで行こうと思う。碧の山も水も、自然は小我を持たぬ。天地間のものすべて無心ではないか。薄暗い暮色の中に月が草原から上り、秋風は林を鳴らして吹き

来り吹き去る。目も見ず耳も聞かず、この身の在ることをさえすっかり忘れて、空中に独り白雲の吟をうたうのである。

飯田利行氏は、

おさとりは、没蹤跡^{もつしようせき}で、ひっそりとして寂靜^{じやくじよう}そのものである。しかもそれは、遠くはるか彼方^{かなた}にあるので、五官のはたきでは認知できない。私は、このはるかなる永遠^{おもひ}の懷を、わが膚身^{はだみ}に直^{じか}につけてみようとして、洋の東西、時の古今にわたる探究の遍歴をこころみてみた。

私のこの両眼にうつる碧水碧山は、我が認識の客体だとばかり思っていたのに、それは、とんでもない思いあがりで、このように思いあがった私などとは、比べ^{くら}ような偉大な実在であったことがわかった。大自然は、こうして仰ぐ天上、また俯してみる地上、ともにただ無心^{むしん}そのもの。そして私たちの勝手なほからいなど、さらさら相手にしてくれない。このように偉大な大自然の真実^{しんじつ}にふれてみると、私のとりつくしまはない。

私の人生の最期^{しやうき}を象徴^{しやうちゆう}するかのような、暮れ^{たそがれ}なんとする黄昏^{たそがれ}どき。無心の月が夕暮れの感傷にひたる私（愁人）をよそに、草原の上に、そつと顔を出しはじめた。また吹きわたる秋風^{ちゆうふう}が、千々に私の心を乱してうろたえさせているのをよそに、林の中を情なく通りぬけてゆき、私を置きざりにしてかえりみない。

蕭々たる人生のたそがれに立って、私は始めて次のような心境をしみじみと味わうことができるようになった。

一つには、凡夫^{ぼんぶ}のはからいにすぎぬ眼見^{げんけん}、耳見^{にけん}という待対^{たいたい}の^{かんがえ}見を相手にしないこと。二つには、その見解^{けんかい}をめぐらす当^{とう}主人公の命^みもまた無にになってしまうこと。かくしてこそ、はじめて空飛ぶ白雲のように、とらわれなく、また誰れはばかりことなく悠々と自適^{しよくしやう}ができるのであった。

以上三氏の解釈である。訓読については大きな差異はないが、解釈は分かれるところがある。

次に、これら各聯各句について私見を述べる。この詩の首聯の「眞蹤」は、「万物の眞実相」をいい、それは奥深くて尋ねあてることの困難をいう。だから、虚心坦懐、心を空無にして古今を歩もうとしてきた。頷聯の「碧水碧山」は無我であり、「蓋天蓋地」は無心である。『碧巖録』第二十二則の「雪峰鼃鼻蛇」の評唱に、

與我蓋天蓋地去、峰於言下大悟（我と与に蓋天蓋地去れば、峰言下に於いて大悟す）

とあり、無為真人の悟境をいう。尾聯の「眼耳」は、月を見る目、視覚、風の音を聴く耳、聴覚で、その感覚も消え失せる。

「身亦失」は、自己の存在も忘れ、空無の状態をいう。『景德傳燈録』の永嘉眞覺大師の「証道歌」に、

心是根法是塵 兩種猶如鏡上痕 痕垢盡除光始現 心法雙亡性即眞（心は是れ根にして法は是れ塵 兩種は猶ほ鏡上の痕の如し、痕垢尽く除かば光始めて現われ、心法双び亡ずれば性は即ち眞なり）

と頷している。心身ともに亡失して永遠不滅の眞になることをいう。「独唱」は、「独り唱う」でなく、「身亦失」であれば、「独だ唱う」と解すべきである。「白雲」は、無我無心、何物にもとらわれない、あるがままの世界である。

漱石はこの詩で、眼耳にとらわれない無心にして無為自然、あるがままの白雲郷をいおうとしたのである。

詩意は、万物の眞実相は寂寞として遙かに深遠で尋ね難いので、虚心坦懐何物にもとらわれない心で、古今を探求しようとしてきた。

あの碧水碧山を見てみると無我であり、蓋天蓋地は無心そのものである。薄暗い日暮れ時、月が草むらからのぼり、入り交じる秋風が林に吹きわたる。目や耳の感覚も消え失せ、身も心も忘失し、空中に只々何物にもとらわれない無心なる白雲をうたうばかりである。

漱石は、幼少期より南画に興味関心をもち、次第に漢学に傾倒し、十五歳の時、漢学塾二松学舎に入塾して漢学を学び、その後英文学に転向するも、漢詩漢文の多くの作品を残している。そして、生涯にわたって利己心、エゴイズムからどう脱

却し、無心なる東洋の詩境に到達するかを求めた。

特に、晩年の大正五年の一年間は、午前中の小説「明暗」執筆とともに午後の漢詩作の中に、その求道心が明確に表現されている。その具体的な例が、十一月十六日木曜会での「則天去私」である。

しかし、漱石はそれに止まらず、さらに高みを極めんとした。清澄で真実を求め続けた漱石は、「明暗」に清子を、十一月十三日の「無題」詩に「真」を、そして、二十日の「無題」詩に「真蹤」を詠じたのである。

注釈

（１） 中村宏氏はその著『漱石漢詩の世界』で、「難解の句。正義衰え暗黒が支配する。または魔界にも正義を守る故に瘦せた人がいる―など。前句を相對界の脱却と見れば、これは現実界の表現である。」と述べている。

（２） 俳句に「其愚には及ぶべからず木瓜の花」とあり、小説「草枕」十二に「木瓜は花のうちで愚かに悟ったものであろう。世間には拙を守るといふ人がある。此人が来世に生れ變ると屹度木瓜になる。余も木瓜になりたい。」とある。

（３） 陶淵明（三六五―四二七）、姓は陶、名は淵明、潜、字は元亮。潯陽柴桑の人。隱逸詩人、田園詩人。漱石の「草枕」に、「飲酒」其五が引用されている。